

Old Parr and his age: The story of a supercentenarian in early modern England

YAMAMOTO Shintaro

Abstract

Thomas Parr, allegedly living to 152 years old, was born in 1483 in Winnington, Parish of Alberbury, Shropshire. He was ordinary husbandman, and he married for first time at 80 years old, was separated from his first wife by death at the age of 112, and then remarried at 122 years old. By 1635, Old Parr became famous for his tremendous longevity, so that he was taken by the great collector Thomas Howard, 14th Earl of Arundel, to London to put on a show. He was finally called to the palace and met King Charles I, but he died six weeks after his arrival in London. After his death, an autopsy was conducted by the royal physician, William Harvey, at the King's command. Harvey concluded that Old Parr was in totally good health, and the cause of death was rich, strong food and drink after a lifetime's simple diet, as well as the polluted air of the megalopolis London. Parr was buried in the south transept of Westminster Abbey.

After the death of Old Parr, the story of extreme longevity appears to have come into fashion in early modern England. For example, Henry Jenkins claimed to have been born in Ellerton-upon-Swale, Yorkshire, in 1501, served at the Battle of Flodden (1513) at the age of 12, and died in Bolton-on-Swale, Yorkshire in 1670, so he was supposed to have lived to 169 years old. This article examines the story of such wondrous supercentenarians as Thomas Parr or Henry Jenkins in early modern England, and the various publications of that longevity in the 19th century. It also surveys the meanings of the religious turmoil seen in the stories of supercentenarians, which reminds us of the importance of the so-called Long Reformation in the Reformation historiography.

オールド・パー **パー爺さんとその時代** ——近世イングランドの長寿者の物語

山本信太郎

はじめに

オールド・パー（Old Parr）というスコッチ・ウイスキーがある。日本では、欧米諸国を視察した明治の岩倉使節団がヨーロッパ文化を代表するものの一つとして持ち帰ったのがこのオールド・パーだと言われており、現在では安く入手出来るが、かつては舶来の高級ウイスキーとして、吉田茂や田中角栄といった昭和の宰相たちによって愛飲された¹⁾。そのオールド・パー（いくつかの種類があるが）の側面のラベルには、長髪で豊かな口ひげとあごひげを蓄えた老人が描かれ、1483 と 1635 という年号が左右に配置されている。またボトルの肩のラベルには「トマス・パー（Thomas Parr）、10 人のイングランド王の治世を生きた男、1485-1635 年」と書かれている。このトマス・パー（d. 1635）²⁾、パー爺さんが本稿の主人公である。なお、パーの肖像画は多く描かれたが、最も有名なのはネーデルラントの外交官としてイングランド宮廷に出入りしていたルーベンスの

1) 矢島裕紀彦「政治家とオールド・パー」『文藝春秋』2013 年 11 月号、84-86 頁。

2) 旧版の『国民伝記辞典（*Dictionary of National Biography*）』（以下、*DNB*）では、パーの生没年は（1483?-1635）となっていたが、現在の『オクスフォード国民伝記辞典』（以下、*ODNB*）では、（d. 1635）とされている。以下本稿では、人物の生没年の表記は *ODNB* に従う。なお、パーについては *ODNB* より、旧版の *DNB* の情報の方がかなり詳細である。



図版① トマス・パーの墓碑

もので、オールド・パーのラベルはこれを元にしていられる。

トマス・パーは、チャールズ 1 世の治世に 152 年生きた
センテナリアン
 百寿者としてイングランド

中の耳目を集め、それゆえに、1635 年秋の死後、時の国王チャールズ 1 世の命で歴代のイングランド王の墓所であるウェストミンスター寺院に埋葬された。現在でも、ウェストミンスター寺院の南翼廊の床に刻まれた彼の墓碑を見ることが出来る（図版①³⁾）。その墓碑には、オールド・パーのラベルが言う 10 人のイングランド王⁴⁾の名が列挙されている。いわく、「サロップ州（County of Sallop）のトマス・パー。1483 年生まれ。彼は 10 人の君主の治世を生きた。すなわち、エドワード 4 世、エドワード 5 世、ヘンリ 7 世、ヘンリ 8 世、エドワード 6 世、メアリ、エリザベス、ジェイムズ、チャールズ。152 歳。そして、1635 年 11 月 15 日にここに葬られた」。本稿は、このパー爺さんの生涯とその後の展開について概観し、近世イングランドに現れた長寿者の物語の受容と影響を検討するとともに⁵⁾、最後には、特に筆者の関心である宗教問題への言及に目を向けながら、パー爺さんや後に述べるジェンキンズ爺さんの時代を、宗教改革の視点からも考えてみたい。

3) ウェストミンスター寺院の HP より。<http://westminster-abbey.org/our-history/people/thomas-parr> (2016 年 9 月)。

4) オールド・パーのラベルにはイングランド王（English Sovereigns）と書かれているが、最後の 2 人がスコットランド王でもあることは言うまでもない。

5) ヨーロッパ史における長寿者や長寿の追求については、以下も参照。パット・セイン編（木下康仁訳）『老人の歴史』2009 年、東洋書林。同書にはトマス・パーについての言及もある。同書、21-22 頁など。

1. パー爺さんの生涯

トマス・パーは、1635年にこの世を去った時、国王チャールズ1世への謁見を果たし、全国的な有名人であった。さらにその名を後世に伝えたのは、その死の年に出版された、「水の詩人」ジョン・テイラー（John Taylor, 1578-1653）⁶⁾による韻文詩『年老いた、年老いた、とても年老いた男 トマス・パーの時代と長い人生』（図版②）⁷⁾と、2葉の一枚刷り（Broadside）『この時代の驚異、もしくは152年生きた男の素描』⁸⁾および『この時代の3つの驚異』⁹⁾である。特にテイラーの著作は1635年中に3つの版が出版され、すぐにアムステルダムでフラマン語版が出され、その後何度も版を重ねて、パー爺さんの物語が人口に膾炙する上で大きな影響力を持った¹⁰⁾。トマス・パーのその後の表象は、基本的にこのテイラーの著作と2葉の印刷物の情報に基づいている。

それらによると、パーは、1483年にウェールズとの境界に隣接したアルババリ（Alberbury）教区の一集落ウィニントン（Winnington）で生まれた。アルババリは、州都シュルズベリから西に8マイルほど離れたシュロップシャ（サロップ州）の教区である。パーは、この辺境の小村で生ま

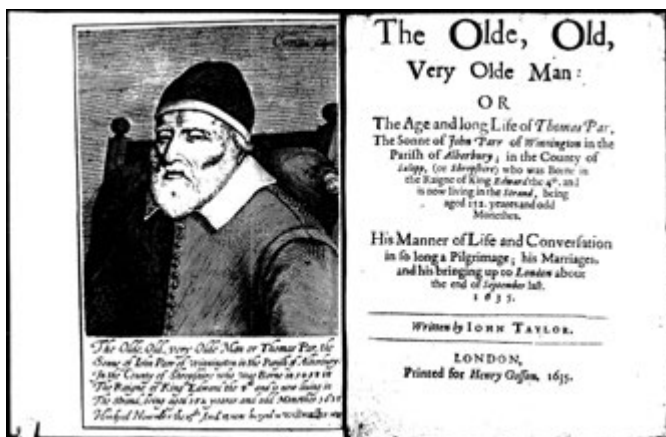
6) グロスタ出身のテイラーは、1590年代にロンドンに移住し、サザックの水夫（Waterman）のもとに徒弟奉公したことから、自ら「水の詩人」を名乗った。Bernard Cap, ‘Taylor, John (1578-1653)’, ODNB.

7) John Taylor, *The olde, old, very olde man: or the age and long life of Thomas Par the sonne of John Parr of Winnington in the parish of Alberbury; in the country of Salopp, (or Shropshire) who was borne in the raigne of King Edward the 4th. and is now living in the Strand, being aged 152. yeares and odd monethes. His manner of life and conversation in so long a pilgrimage; his marriages, and his bringing up to London about the end of September last. 1635*, London, 1635.

8) Thomas Heywood, *The Wonder of this Age: or, the Picture of a man living, who is one hundred fifty two yeeres old*, London, 1635.

9) Anon., *The three vonders of this age*, London, 1636.

10) ‘Taylor’, ODNB.



図版② テイラー『年老いた、年老いた、とても年老いた男』（1635年）

れ育ち、徒弟奉公の期間を除いてロンドンに連れて行かれるまでの152年の時を過ごしたとされる。

トマス・パーは、平凡な農民ジョン・パーの息子に生まれ、17歳となった1500年に奉公に出て、1518年の父の死にともなってその農地を引き継いだ。彼は80歳までは独身で、エリザベス1世治下の1563年にジェイン・テイラーと最初の結婚をして一男一女をもうけたが、ともに幼くして死んだ。ジェインは結婚して32年後の1595年に世を去ったが、実はこの間、パー爺さんは、105歳の時、すなわちイングランドにスペイン無敵艦隊が襲来した1588年に、キャサリン・ミルトン（Katherine Milton）なる女性との不義密通の廉で、アルババリ教区教会によって、白布の上に立って教区民の前で懺悔することを課されている¹¹⁾。ジェイムズ1世の治世となった1605年、122歳となったパー爺さんは、ウェールズのモン

11) 『この時代の驚異』では、104歳になった後に、メイド（名前は不詳）との間に子どもをもうけたことで懺悔を課されたことになっている。また、不倫相手のキャサリン・ミルトンとの間に子どもをもうけたという記述もある。

ゴメリシャ出身で、アンソニ・エイダ（Anthony Adda）の未亡人ジェインと再婚したとされる。

すでにこの頃、パー爺さんは驚異の長寿者として、近隣の評判であったようである。シュロップシャの所領に立ち寄った第14代アランデル伯トマス・ハワード（Thomas Howard, 14th Earl of Arundel, 1585-1646）がその評判を聞きつけた。アランデルは、イングランドで最も格の高い貴族ノーフォーク公爵ハワード家の当主で、祖父はエリザベス1世治下にカトリックの復権を企図し、祖国を追われたスコットランド女王メアリ・ステュアートのイングランド王位への登極を目論み、1569年に起こったカトリック貴族による北部諸侯の反乱の後に処刑された第4代ノーフォーク公トマス・ハワード、父はその息子でカトリック信仰ゆえに獄死した第13代アランデル伯フィリップ・ハワードである¹²⁾。反逆者の家系であったが、ジェイムズ1世が即位すると、アランデル伯位の継承と復権を認められ（1644年にはノーフォーク伯）、宮廷でも台頭した¹³⁾。彼はまた美術品愛好家としても知られ、諸外国を旅行し、当代一流の芸術家たちとの交流を持った。その中にはルーベンスも含まれ、ルーベンスによるアランデルの肖像画も描かれているので、ルーベンスがパー爺さんのスケッチを残しているのも、この関係であろう。また絵画のみならず、多様な美術品の収集家として有名であったアランデルにとって、話題の驚異であったパー爺さんは、一種の収集物だったと言えるのかもしれない。いずれにせよ、このアランデルによって、1635年、パーは生まれ育ったウィニントンを離れてロンドンに連れて行かれることになるのである。

パー爺さんがすでに有名人であったことは、ロンドンに向かう途上、立

12) R. Malcolm Smuts, 'Howard, Thomas, fourteenth earl of Arundel, fourth earl of Surrey, and first earl of Norfolk (1585-1646)', *ODNB*.

13) ノーフォーク公爵位の復権は、王政復古の1660年に彼の孫で同名のトマス・ハワードに認められた。

ち寄った先で多くの見物人を集めたことから分かる。テイラーの『年老いた、年老いた、とても年老いた男』には、ロンドンまでの詳細な道のりが述べられており、特にコヴェントリでは、多くの群衆がこの老人を見ようと押しかけたことが描かれている。こうしてパー爺さんはロンドンに上京し、多くの見物人を集めるとともに、国王チャールズ1世にも謁見することになり、ますます有名となったが、ロンドン到着後、わずか6週間でこの世を去ることになるのである。

驚異の長寿パー爺さんの突然の死に対して、チャールズ1世は侍医であり血液循環論で有名であったウィリアム・ハーヴェイ（William Harvey, 1578-1657）を遣わして、検死を行わせた。その検死結果は極めて詳細で、臓器ごとの状況が逐一記録してあり¹⁴⁾、それによれば、すでに盲目になってはいたが、その他のパー爺さんの身体は死の時点でも極めて健康であったとされる¹⁵⁾。死因は直接的には呼吸困難とされたが、むしろ病理的なものではなく、長年に及ぶ食を含む田舎の質素な生活から、突然ロンドンの都会の生活と空気にさらされたことと推察された。これは、先述した一枚刷り『この時代の驚異』に「(彼自身の証言によれば) 田舎での彼の日常食は、牛乳、バター、チーズ、白身の肉だけであり、飲み物は乳清、たまにイングランド古来の酒であるエールである。肉を食べることは減多になく、ワインを飲んだことはなかった」と述べられたこととも合致している。この点について『オクスフォード国民伝記辞典』でパーの項目を担当したキース・トマスは、同時代のそのような表現は、「大都会の贅沢に

14) William Harvey, 'Anatomia Thomae Parri annum centesimum quinquagesimum secundum & novem menses Agentis. Cum Gulielmi Harvaei aliorumque adstantium Medecorum Regionum Observationibus', in J. Betts, *De ortu et natura sanguinis*, London, 1669, pp. 317-325. 英訳は以下。G. Keynes, *The life of William Harvey*, Oxford, 1966, repr. 1978, pp. 222-225.

15) 基本的にハーヴェイは、152歳というパーの驚異的な年齢には疑義を差し挟んでいない。ハーヴェイの検死報告書の態度と、パーの長寿への後世における懐疑については、以下を参照。William J. Ford, 'Old Parr', *Bulletin of the History of Medicine*, 24, 1950, pp. 219-226.

よって墮落させられていない、粗食と重労働によって生きる古来のイングランドの象徴」として、パー爺さんの物語が用いられたのだと述べる¹⁶⁾。確かに、同時代にあって、パー爺さんの長寿とロンドンでの突然の死の物語には、ジェームズ1世をして「いつかイングランド全体を飲み込むであろう」と言わしめた怪物都市ロンドンの急速過ぎる発展への警鐘と、古き良きイングランドの農村生活への憧憬が込められていたのかも知れない。

2. ジェンキンス爺さんと長寿者の物語

すでに述べたようにテイラーの『年老いた、年老いた、とても年老いた男』は18世紀を通して版を重ねた¹⁷⁾。また、それ以外にもパー爺さんの物語は、後に見るように様々なヴァリエーションの出版物を生み出したのである。そこには、同時代の長寿へのあこがれが存在していたように思われる。もっとも、『旧約聖書』の「創世記」の登場人物が驚異的な長寿として描写される点からも、長寿は人類にとって普遍のあこがれだったと言えるかも知れない¹⁸⁾。あるいは、宗教改革によってそのような聖書の物語が俗語として読めるようになったことが、近世イングランドにおける長寿の物語の流布と関係していた可能性もある。また、キース・トマスは、近世においては、長寿は権威の象徴であったと述べる¹⁹⁾。事実、パー爺さんの登場以降（それ以前にもあったが）、驚異的な長寿者は多く記録さ

16) Keith Thomas, 'Thomas Parr', *ODNB*. 本稿でも同項目の記述に多くを負っている。

17) Eighteenth Century Collection Online (ECCO) での検索によれば、1703年、1730年(?)、1794年の3版が確認された。

18) 「創世記」の登場人物は、最初の人アダム(930歳)以来、徐々に短命になっていくが、それでも最後の登場人物ヨセフは110歳である。なお、最高齢は箱船で有名なノア(自身は950歳)の祖父にあたるメトシェラ(969歳)である。ちなみに、この後述べるヘンリ・ジェンキンスは「現代のメトシェラ(Modern Methuselah)」とも称される。

19) Keith Thomas, 'Age and Authority in Early Modern England', *Proceedings of the British Academy*, 62, 1976, pp. 205-48.

れている。また、パーの子どもや孫も極めて長寿であったとする記述もあったようである²⁰⁾。具体的には、パーの息子は113歳、孫は109歳、ひ孫の一人であるロバート・パーは124歳、もう一人のひ孫のジョン・ニューエル (John Newel) は1761年7月に127歳で死去したと言われている²¹⁾。そのように次々と現れた長寿者の中でも、パー爺さんよりも長生きしたのが、ピューリタン革命を経て、王政復古後の1670年に169歳で死んだとされるヘンリ・ジェンキンス (Henry Jenkins, d. 1670) であった。

ジェンキンス爺さんの物語は、1695年に出版された『フィロソフィカル・トランザクション』誌に掲載された、アン・サヴィル (Anne Savile) なる女性の手紙にもとづくタンクレド・ロビンソン (Tancred Robinson) 医師の記事によって世に知られることとなった²²⁾。アン・サヴィルによると、彼女がヨークより40マイルほど北にあるヨークシャのボルトン・オン・スウェイル (Bolton on Swale) 教区に住み始めた頃、近隣に150歳を超える男がいるとの噂を聞いていたが、ある時、当のヘンリ・ジェンキンスが物乞いに來たので、根掘り葉掘り問いただしたのだと言う。いわく、このインタビューが行われたのが1662年ないし1663年で、ジェンキンスは162歳ないし163歳。ジェンキンスは、本人の言によれば、もともとコンヤーズ卿 (William Conyers, 1st Baron Conyers, 1467/8-1524) の執事をつとめていたとのことであり、また、記憶を辿れば10歳から12歳の時にフロッドン (Flodden) の戦いにおいて、イングランド軍に従軍したと言う。フロッドンの戦いは、1513年にイングランドとスコットランドの国

20) Ford, *op. cit.*, p. 221.

21) 'Parr, Thomas (1483? -1635)', *DNB*.

22) Tancred Robinson, 'A Letter Giving an Account of One Henry Jenkins a Yorkshire Man, Who Attained the Age of 169 Years, Communicated by Dr. Tancred Robinson F. of the Coll. of Physitians, et R. S. with His Remarks on It', *Philosophical Transactions of the Royal Society*, vol. 19, 1695-97, pp. 266-268.

境に近いノーサンバランドのフロッドン・フィールドで両王国軍が衝突し、スコットランド軍が大敗して国王ジェイムズ4世が戦死した戦いである。ジェンキンズは、陣中に国王ヘンリ8世がいたかと問われ、ヘンリ8世はフランスに遠征中で、司令官はサリ伯(Thomas Howard, Earl of Surrey, later 2nd Duke of Norfolk, 1443-1524)であったと正確に答えたと言う²³⁾。

上記のようなアン・サヴィルの聞き取りにもとづき、記事は、ジェンキンズがフロッドンの戦いの時に12歳であったならば、生まれは1501年であったとした。また、ジェンキンズはコンヤーズ卿に仕えた後は漁師となるが、後半生は物乞いをして過ごし、1670年12月8日に、ボルトンより南に1マイルほど行った生まれ故郷のエラトン・アポン・スウェイル(Ellerton upon Swale)で死んだとされる²⁴⁾。また、それゆえに、ジェンキンズは169歳で死んだので、152歳9ヶ月で死んだトマス・パーより16年長生きしたことを記事は強調し、最後に、ジェンキンズ爺さんの体の気質や、生き方(manner of living)、その他の状況が長寿に興味を持つ人々の有益な指針になるのだと述べる。実はこの点こそが、長寿者の物語が後に語り継がれて行く理由ともなるのである。

17世紀に現れたパー爺さんの名前は、20世紀初頭にブレンデッド・ウィスキーの銘柄になることによって日本人にも知られるようになったのだが、そもそも、パー爺さんやジェンキンズ爺さんの物語は20世紀以前のイギリスでも繰り返し語られた。ここでは、19世紀以降に出版された、パー爺さんやジェンキンズ爺さんの物語にもとづく出版物のヴァリエーション

23) ちなみに、このサリ伯トマス・ハワードは、パー爺さんをロンドンに連れて行ったアランデル伯の祖父第4代ノーフォーク公トマス・ハワードの曾祖父にあたる。

24) ジェンキンズの遺体は、翌12月9日にボルトンに葬られた。教区司祭チャールズ・アンソニ(Charles Anthony)は、ジェンキンズのことを教区簿冊に、「とても年老いた貧しい男(a very aged and poore man)」と書き留めている。また、彼には妻がいたが、彼より数年長生きし、同じくボルトンに葬られた。1743年にはボルトン教区教会のチャーチヤードにジェンキンズの記念碑が建てられている。Gordon Goodwin, 'Jenkins, Henry (d. 1670)', rev. Eleanor O'Keeffe, *ODNB*.



図版③ 『152歳まで生きたトマス・パーの驚くべき生涯と時代』(1853年)

ンをいくつか紹介してみたいが、一言で言えば、それらに共通するのは、長寿への処方箋という性格である。

1841年に出版された、その名も『パー爺さんの遺言状』は、まさに近年になってトマス・パーが書いた遺言状が大変良い保存状態で発見され、その中にパー爺さんの長寿の秘訣とも言える「レシピ」(処方箋)が書かれてい

たという触れ込みであった²⁵⁾。極めて眉唾ものの話しであり、遺言状の真偽のほどは、その存在も含めて怪しいのだが、このパーのレシピにもとづく「パーの命の薬(Parr's Life Pills)」は、様々な出版物で紹介されていくことになる。例えば、同じ1841年に出版された『152歳まで生きたトマス・パーの驚くべき生涯と時代』は、副題が「病と健康と長生きの秘訣についての所見」となっており、先の『パー爺さんの遺言状』を引き写す形で、「パーの命の薬の服用のための使用法(Direction for taking of Parr's Life Pills)」を詳細に載せている²⁶⁾。同書は版を重ねただけではなく、極めて小さな「豆本」の形式で出版されており、気軽に手に取れる書物として流通したことが想像される(図版③を参照。隣の1ポンド硬貨と比較されたい。英国図書館[British Library]にて筆者撮影。ただし、図

25) Thomas Parr, of Winnington, Shropshire, *Old Parr's last Will and Testament*, London, 1841.

26) Thomas Parr, of Winnington, Shropshire, *The extraordinary life and times of Thomas Parr who lived to be 152 years of age. With remarks on disease and health and the means of prolonging life. [With testimonials in favour of Old Parr's Infallible Life Pills.]*, London, 1841.

版は 1853 年版)。

ジェンキンズ爺さんについての 19 世紀における出版物も、同様である。1820 年に出版された『驚くべき驚異の男ヘンリ・ジェンキンズの唯一の真正にして信頼に足る伝記と記録』では、後半に「ヘンリ・ジェンキンズによってサヴィル夫人に伝えられた 604 の価値あるレシピの集成」なる、極めて怪しげなりストが収録されている²⁷⁾。冒頭から一部引用してみると、

1. マラリア熱 (Ague) — 切った大きな玉葱を腹部にあてる。
 2. もしくは、寒気がする前に 1 パイントの冷水を飲み、ベッドに行って発汗させる。
 3. もしくは、小さなレモンを丸ごと食べる。
- (中略)
10. 丹毒 (St. Anthony's Fire) — ベッドで 1 時間ごとに温めたタール水 (Tar Water) を飲み、患部を同じくタール水で洗う。
 11. タール水の作り方 — (後略)

といった具合で、これが 604 続く。ご丁寧に、十字の印があるものは、サヴィル夫人によってすでに証明されたものであると書かれている²⁸⁾。また、1824 年にジェンキンズ爺さんのイラストを表紙にして、『フィロソ

27) *The only genuine and authentic edition of the Life and memoirs of that surprising and wonderful man Henry Jenkins, commonly called Old Jenkins, of Ellerton-upon-Swale, in Yorkshire; who lived to the astonishing age of 169 years and upwards, which is seventeen years longer than Old Parr ... Written from his own dictation at the age of one hundred and sixty-three years, by Mrs. Ann Saville, Salisbury, c. 1820.*

28) ジェンキンズについての文書の集成である以下の文献の脚注には、アン・サヴィルは、初代メクスバラ伯ジョン・サヴィル (John Savile, 1st Earl of Mexborough, 1719-1778) の直系の先祖であるジョン・サヴィルの娘であると書かれている。*Evidences of the great age of Henry Jenkins, with notices respecting longevity and long-lived persons*, Richmond, 1859.



図版④ 『メディカル・アドヴァイザ』
(1824年)

フィカル・トランザクション』誌のアン・サヴィルの手紙をそのまま再掲した雑誌のタイトルは、まさに『メディカル・アドヴァイザ 健康と長生きへの手引き』であった（図版④）²⁹⁾。このように、パー爺さんやジェンキンズ爺さんの物語は、長寿を追究しようとする文脈の中で、繰り返し参照され、語り継がれていったのである。

3. 驚異の長寿者と宗教改革

最後に、全く角度を変えて、パー爺さんやジェンキンズ爺さんの物語

の中での宗教についての言及に着目してみたい。彼らが生きた近世の前半は、宗教的には激動の時代であった。パー爺さんの生涯は、ヘンリ8世治下のローマ・カトリックとの断絶から、短期間の君主の交代によって公的な宗教体制が二転三転したミッド・テューダー期を経て、エリザベス1世の国教会体制、そして、初期ステュアート朝の2代の国王での新たな宗教的展開の時代を含むからである。さらに、ジェンキンズ爺さんの場合では、ヘンリ8世の宗教改革というスタートは同じで、いわゆる「ひっくり返った世界」であるピューリタン革命から王政復古までをも含む。

もともと筆者は、エドワード6世のプロテスタント急進改革の6年とメ

29) 'The great age of Henry Jenkins, by Mrs. Anne Saville', *The Medical Adviser, and Guide to Health and Long Life*, No. 34, 1824, pp. 113-114.

アリ1世のカトリック復帰の5年という短い期間での宗教的変動を含む経験が個人にどのような影響を及ぼすかということに関心を抱いており³⁰⁾、もちろん、152歳や169歳という長寿者を歴史的事実として額面通りに受け取っているわけではないが、そのような、より長いスパンで宗教的変動を経験したはずの人物の物語の中に、どのような言説が見られるかという興味からトマス・パーの調査を始めたのである。しかし、結論から言えば、パーやジェンキンズの同時代的証言の中に、そのような関心に応えてくれるものはほとんど存在しなかった。ただし、ジェンキンズ爺さんに関しては、同時代ではないが、彼の宗教についての興味深い論評が残っている。

まず、パー爺さんについてだが、宗教に関する記述が全く残っていないわけではない。彼は国王チャールズ1世に謁見した際、宗教的なことがらについて問われると、当代の国王や女王の宗教を信じていることが最も安全だ、「というのも、我々は生の状態でこの世に来たのに、焼かれてこの世を去るのは愚かなことだからだ」³¹⁾と答えたと言われている³²⁾。この言葉が事実であるとするならば、少なくとも生まれ育ったシュロップシャの辺境の小村から出ることのなかったパー爺さんにも、国王の交代とともに公的な宗教体制が大きく変化していた事実が認識されていたということであり、興味深い。また、長期に渡る宗教的変動を経験した個人が、宗教そのものに抱く感情の一事例としても注目に値するであろう。しかし、この発言については、これ以上追究する材料は今のところ存在しない。

他方、ジェンキンズ爺さんについては、1829年に彼の信仰について考

30) そのような関心を含みつつ、ミッド・テューダー期の教区教会の経験を描こうとした試みが以下の拙著である。山本信太郎『イングランド宗教改革の社会史 ミッド・テューダー期の教区教会』立教大学出版会、2009年。

31) 異端として火刑に処されることを指している。

32) Keynes, *op. cit.*, p. 221; Parr, *DNB*. ただし、この発言は少なくともテイラーの『年老いた、年老いた、とても年老いた男』の中には見いだせない。

察した記事が週間雑誌『ミラー・オヴ・リテラチャ・アミューズメント・アンド・インストラクション』に掲載されている³³⁾。その記事によれば、ジェンキンズは生涯に8回宗教を変えたのであり、それらの宗教は法によって彼に求められたのだという。8回の宗教の変化については、記事の中で下記のような表にまとめられている。

		治世	基本的な体制	期間
1 番目	1501 年から 1534 年	ヘンリ 7 世と 8 世	カトリック	33 年
2 番目	1534 年から 1547 年	ヘンリ 8 世	カトリックとイングランド国教会の間	13 年
3 番目	1547 年から 1553 年	エドワード 6 世	イングランド国教会	6 年
4 番目	1553 年から 1558 年	メアリ	カトリック	5 年
5 番目	1558 年から 1649 年	エリザベス、ジェイムズ 1 世、チャールズ 1 世	イングランド国教会	91 年
6 番目	1649 年から 1654 年	空位期	狂信	4 年
7 番目	1654 年から 1660 年	護国卿政権	長老派	7 年
8 番目	1660 年から 1670 年	チャールズ 2 世	イングランド国教会	10 年

169 年、ジェンキンズの年齢

表の前には、表についての短い説明があり、表の後にはジェンキンズがボルトン・オン・スウェイルに埋葬されたことと、その墓碑の引き写しがあるだけの極めて短い記事であり、この記事の意図がどの辺にあるのかは良く分からない。記事の内容に関しても、ジェンキンズ爺さんがこのように自分の信仰について告白したとの記録は他に見当たらないので、事実上、

33) Arthur Ebor, 'Henry Jenkins', *The Mirror of Literature, Amusement, and Instruction*, vol. 14, no. 394, 1829, pp. 242-243.

ジェンキンズが生きたとされる 169 年間の公的な宗教の変遷を並べただけのものなのかも知れない。しかし、そうであれば、空位期の「狂信 (F fanatic)」という表記は奇異な表現で目を引くし、宗派の混成体制とも言えるクロムウェルの護国卿政権期において、ジェンキンズが自ずと長老派になったというのもおかしい話であろう。また、国王至上法成立 (1534 年) 以降のヘンリ 8 世の治世を「カトリックとイングランド国教会の間 (Between Catholic & Church of England)」と表現していることの含意も気になるところである。

掲載誌である『ミラー・オヴ・リテラチャ・アミューズメント・アンド・インストラクション』は、1822 年創刊の文芸と文化を扱った週刊誌で、1820 年代に大量に登場した低価格 (2 ペンス) の週刊誌の中では最も成功した雑誌の一つと言われるが、特に宗教的傾向があるわけではない³⁴⁾。この記事が出た 1829 年はカトリック解放法が成立した年でもあり、もしかすると、そのような世相を何らかの形で風刺しようとした記事だったのかも知れない。いずれにせよ、唐突にジェンキンズ爺さんの宗教的信条について論じたこの記事の、同時代の出版文化における位置づけを探ることに関しては、今後の課題としておきたい。ただし、ヘンリ・ジェンキンズが生きたとされる時代を宗教的な観点を通して見たこの記事は、ヘンリ 8 世の離婚問題と国教会の創設に始まった宗教改革が、いかに長いスパンで論じることが出来る事象であるか、あるいは長いスパンで論じることが求められている事象であるかを再確認させてくれる。近年、複合国家としてのブリテンに注目が集まり、空間的な広がりを持った「ブリテンの宗教改革」が論じられるようになってきたが³⁵⁾、それよりも早くに提

34) 同誌は発刊当初 8 万部から始まり、最高 15 万部に達した。Jonathan R. Topham, 'John Limbird, Thomas Byerley, and the Production of Cheap Periodicals in the 1820s', *Book History*, vol. 8, pp. 75-106.

35) この点については、以下の、特に「はじめに」を参照。山本信太郎「イングランド宗教改革とウェールズ」『人文研究所報』(神奈川大学人文研究所)、52 号、2014 年、77-94 頁。

起された「長い宗教改革」論にも改めて光をあて³⁶⁾、併せて議論される必要があることを、この記事は気づかせてくれる。

おわりに

本稿は、パー爺さんとジェンキンズ爺さんの物語をとりあげ、それらが近世イングランドにおいてどのように発生し、またその後いかに表象されてきたかを考察した。近世に現れた驚異の長寿者の物語は、その後の長寿と健康への関心の高まりの中で、多くの不確かな逸話や、あるいは明らかに捏造された情報を付加されながら、ヴァリエーションを変えて繰り返し語られた。そのような長寿者の物語の展開は、いまだ旧約聖書的な長寿の可能性が完全に否定されたわけではない社会を反映していたと言えるかも知れない。

そのような結論は、ある意味ではありきたりでもあるので、本稿では、筆者の関心からこれら近世の長寿者の物語に宗教改革研究の視点からのアプローチを試みた。こちらも、結論から言えば、パー爺さんやジェンキンズ爺さんの生涯についての情報から、何らかの直接的な示唆を得ることは出来なかった。しかし、近世の宗教的激動期を生き抜いたとされる長寿者たちの情報を追いかける中で、近年では等閑に付されがちな「長い宗教改革」論にもう一度目を向けさせられたことは、一つの収穫だったと言える。

36) 以下を参照。Nicholas Tyacke, ed., *England's Long Reformation, 1500-1800*, London, 1998.

付記

日高昭二先生には、研究室が向かいということもあって、着任以来、公私ともに大変お世話になった。記して感謝する次第である。